

# 史林

## 第四卷 第參號

大正八年七月一日發行  
(通卷第十五號)

### 研究

## 加羅疆域考(上)

文學士 今西 龍

朝鮮にて加羅諸國と稱するものは大體に於て日本にて任那諸國と稱するものなり。加羅は加良、迦羅、呵囉、伽落、鴛落、加耶、伽耶等の文字を用ゐて示すことあり。但し朝鮮語「良」(ラ)「耶」(ヤ)相通するを以て加良と加耶とは別異の稱呼にあらず。加羅諸國の多くが弁辰の國々の残りしものなるべきことは第一に其位置よりして第二に魏志に列擧する弁辰十二國中古資彌凍國、狗邪國、安邪國の如きが明に加羅諸國として後に現はるゝによりて推知しうべく既に諸家の定説たり。今先づ加羅任那の稱呼に就て述べし。

加羅は「カラ」なり。日本書紀等には朝鮮半島の地理的稱呼として韓または三韓と書して之を「カラ」と訓ませたり。朝鮮人また半島の地理的稱呼に三韓または韓の文字を用ゆる事三韓と稱するを常とし韓と稱すること少し古より今に至るまで引き續けども其訓方を失し字音を以て之を呼べり。然りと雖「カラ」は上古朝鮮人の自稱にして尙ほ古くは「カンラ」もしくは「カンナラ」と稱せしを秦漢の人此「カン」の假字に「韓」の字を用ひ樂浪帶方の漢人之を襲用し日本及び朝鮮に傳へしもの、如し。

韓侖は汗汗などの字を用ひしことあり。現代朝鮮語に國を<sup>ク</sup>カ(クニ)といふ。「ナラ」は古語「ラ」の延びしものなるか或は「ラ」は「ナラ」の約まれるものなるかいづれかなるべし。朝鮮古代地名には「火」「伐」「弗」の字を附せるもの多し。「火」字は訓にて<sup>ヒ</sup>ヒ(ヒ)アル、と發音し、「伐」弗共に音にて<sup>フ</sup>フ(フ)ホルと發音す。百濟の地方には夫里<sup>フ</sup>フ(フ)リ(Pu.ri)の文字を用ゆるもの多し。尙ほ上代には卑離<sup>フ</sup>フ(フ)リ(Pu.ri)の文字あり。是れ皆「火」の語若くは其轉訛にして「火」の語と邑落若くは國といふ語とは同一なり。恐くは各邑落毎に埋火を有せし

事ありしに因るか。伐弗字を借りて火の義より延きて光の義を表はせらば「弗短内」の義「光明理世」にして更に漢字譯して赫居世とし王氏高麗の第四王昭を尊稱して伐昭大王と書けるにて知るべし。高句麗の地名には忽の字を附せるもの多し忽の現代音は<sup>ヒ</sup>ヒ(ヒ)なれど古音は「コル」にし坪字に代用せる評の字の訓「コハリ」と同じ。其いづれも其行の音に終ることとは「カラ」の「ラ」の語を研究するに當りて注意すべきことなるべし。「カフ」の「カ」は「カン」のつゞまりしにて干またけ早の字を用ひて音を表はし時に「翰」或は「那」の字を用ひ其音訛りて察或は浪の字音を以て表はせることあり。「カン」は邦語の「カミ」に同じく「神」「上」「酋長」「大」の義なり。上代の朝鮮語に「早破」の文字を用ひて其音を表せることあり。新井白石は東雅に「カミ」と云ふ語轉じてクマともいひけり、とて古事記日本書紀の神名中に神と書くべきを熊と書ける例を挙げたり。此事朝鮮にても同じきが如し。古地名よりして論證すべき資あれど本論文の範圍にあらざれば之を略すべし。「神」の字朝鮮にては音にて<sup>シ</sup>シ(シ)とよみ神の朝鮮語は既に失はれしと思ひ居りしに崔南善氏の新字典には神の字に<sup>シ</sup>シ(シ)と訓せり。熊は<sup>ク</sup>ク(ク)なり古語は「固麻」の字音に近かりしが如し。「大」の古語は「固麻」の假字にて表し得たるが如し但し大の朝鮮現代語は<sup>テ</sup>テ(テ)クンなり。大なる津を固麻

奈利と命名し熊津と書けり。津は現代語にても水渡處の意味のときによりは *Yuk-han-ya* といふ。

如上の例にて推定するに「カラ」は「神の國」もしくは「大國」の義なり。思うに「神國」の義なるべし。丁若鏞北邦疆域考に曰く韓者大也、方言凡大者謂之韓、奴謂其主曰韓物、猶中國之言大人也、洌水以北近於中國、文明差早、洌水以南益復荒遠、共推其酋豪、謂之爲韓、此韓之所以得名也。那珂博士は外交羅史三韓考に「サテ韓ト云フ名ノ起リも其ノ國ニ數多ノ首長アリテ千岐又ハ千ト云ヒタルガ故に千ノ國ト呼ビタルナリ」と説かれたり。

日本にては朝鮮半島の南半即ち韓種族の住地を「カラ」と稱せしが後代に至りては此稱呼の地方の範圍擴まりて朝鮮と地續きの支那をも含むに至り次で半島に新羅高麗朝鮮等統一せる國家起るに及び半島を呼ぶには此政治的稱呼を以てし「カラ」の稱は主として支那に用らるゝに至れり。

上代に韓をカラと云へるに對し漢をアヤと云ひ漢人をアヤ人と稱せり。新井白石東雅に漢讀でアヤといふは當時三韓の方言なりと説けり。魏志に辰韓の人は熊浪人を名けて阿殘と爲す東方の人我を名けて阿となす樂浪の人本と其の殘餘の人な

るを謂ふなりと記せり。是れ假字たる殘字を讀くに字義を以てせる説にして恐くば非なり。「アヤ」は「阿殘」と同類語にして朝鮮語「ヤ」は「リ」と相轉するを以て「アヤ」は「アリ」に同じかるべく「アリ」は「大」の義なり。廣開土王陸碑に百濟を百殘と書けり。濟殘音近似せしなり。阿殘の語新羅にては其國官位第六等に當る阿奈(或云阿奈)となり、日本にては朝臣(アソン)となれり。

朝鮮半島に於ては第三世期の頃より辰韓の一國たりし斯慮即ち新羅次第に強大となり又馬韓の方面にありては是より少しく先に扶余種の一部大陸より南下し樂浪帶方の地を奔過して馬韓の北邊に入り其の伯濟國の地を占め所謂百濟國を建て帶方の衰弱せるに乗じて漢水の南なる漢山即ち今の廣州に奠都し馬韓諸國を漸次併吞せり。新羅また辰韓の諸國を併せたるを以て古來の「カラ」種の國は東に於ては新羅となり西に於て百濟となり「カラ」を以て呼ばるゝ範圍は減少せしが殘存せるカラ種の古國は結束を堅うし當時日本島統一の事業略完

成せし日本朝廷の保護の下に其國即ちカラの國を維持せしものゝ如し。而して其の殘存せしカラの國は重に弁辰或は弁韓の諸國なりしなり。殘存せしカラの國と日本朝廷との交通は一層煩雜となりしが日本にて「カラ」といへば從來の如く新羅の地も百濟の地をも含みて餘りに漠然として境なく殘存せるカラ諸國の地のみの稱呼とせんには混雜多かりしを以て此殘存せるカラ諸國の地を何時となしに任那と稱するに至れるなるべし新羅人は此殘存せる諸國を總稱してカラ若くばカヤと稱し日本人は任那と稱せり。是れ彼の加羅と我が任那と同一の地を指す所以なり。然るに後に考證するが如く任那は本と加羅の一國たる金官加羅の特稱なりしが此地は日本と半島との交通の門戸に當りしと半島經營の府が早き時代に置かれしこと故を以て日本人は「カラ」の稱呼を大陸にまで及ぼし更に唐の語を遠西にまで及ぼせしと同一の心理的作用によりて任那の語を殘存せるカラ諸國の地全體の稱呼と爲すに至りしものゝ如し。左れば國史に任那と書けるものは時には特殊の任那を指し時にはカラ諸國の總稱に用ひ時には半島經營の中心地たりし地方を指すを以て混雜甚だし。而して殘存せる加羅諸國の大多數は類似の風俗共同の神話を有し薄弱ながらも諸國間に結束を有し其諸國の王の強大なるものは *King of Kings* を以て自任し國を大加羅(若くば大加耶)と稱し其大加羅と稱せしもの一二に止まらざりしを以て日本國史の紀事にも更に混雜を生ぜり。朝鮮に於ては金海金に在りし加羅國も大加羅の名を以て傳はり高靈官に在りし加羅國も大加耶の名を以て傳はり大カラと稱せしもの二國ありしを以て後世の史家を全く迷霧の裡に導くに至れり。但し加羅國のありし地方の多くには新羅王朝末若くば高麗王朝前期に至れば、其國の存せし事ありし事のみ傳はり特殊の國名を失せしも

の少なからざる也。加羅任那の研究は同じく大加羅大加耶或は單に加羅加耶と稱するものを別ちて之を明にし任那の語が廣義に使用されたる場合と狹義に使用されたる場合を明にするを以て第一とす。

加羅を任那と稱し任那を「ミマナ」と讀む所以は早くより日本人には不明となりしものゝ如し。書紀には御間城天皇の御名を負りて其國名とせりと解するに至れり。伴信友翁は中外經緯傳に之を説明して曰く。

「任字ハ「シン」又「ニン」音ナルヲ「ニン」ノ「ニ」ト「ミ」ト通フ音ナレバ其カミ彼國ノ訛音ニ「ミン」ト唱ヘナラヒタルマ、「ミマ」トイフニ叶ヘテ任那ト書キ連ネタルモノナルベシ。ナホイハバ昔ヨリ壬生ヲ「ミブ」ト「ニブ」ト二様ニ唱ヘ來レルモモト壬字ヲ「ニン」トモ「ミン」トモ唱ヘタルコトナルベキコトハタ思ヒ合ス

ンソ。

と説かれたり。思ふに古代朝鮮に於て「ニ」音と「ミ」音とは相轉せしなるべし。顯著なる一例を舉ぐれば日本書紀神功紀に新羅王波沙寐錦あり。新羅の末に崔致遠が撰みし智證大師塔碑に遍頭居寐錦之尊の語あり。寐錦が新羅の王號尼師今を別字を以て表はせしものなることは明白なり。寐字の朝鮮現代音は<sup>ミ</sup>ミにして新撰字鏡にも寐已至反とあり寐錦の「ミキン」なること知るべし書紀にムキンを讀ませしは音便なり。尼師今「ニシキン」のシ音略せられて「ニキン」となり轉じて「ミキン」となりしか或は「ミキン」より「ニシキン」に轉せしかなるべし。「ニンナ」の「ミンナ」となり「ミマナ」となるは怪むに足らず。

加羅の稱呼はもと半島に於ける韓種の住せし全地の名なりしを以て加羅加耶の名の残れる地方慶尚道に多し。新羅六部(略評)の「に金山加利村あり。利は羅に通ず。此の加利村が後に漢城部となりしことは六部の「に伴跋國」と同名の本彼部のあ

りしことと共に研究を要するものなり。尙州に新加長部曲あり。但し此部曲は新羅人が加羅の遺民を收集して作りし特殊のものなるかの疑あり。安東に加羅漕院あり。慈仁縣に朴加利あり。慶春陽熙の古名は加耶郷なり。洛東江は駕洛の東の江の義なるが此江は梁山の西にて伽耶津の名あり。蔚山に加里山あり。巨濟島に加羅山あり。唐島正しくは加羅島なり。熊川に加耶峽あり。星州の伽耶山は人の知る所なり。

二

朝鮮に於ては新羅高句麗百濟と時を同うして加羅に六國ありし事を傳ふ

王氏高麗の文宗王の大康年間(1075-1084A.D.)に金官即ち今の金海の知州事某の撰せしといふ駕洛國記此書三國遺事に抄錄せられて遺存すに黄金の卵六個龜旨峰に降下し六卵化して童子と爲り始めて現せしを首露となすとし其月望日に即位すとす

始現故諱首露或云首陵首陵是屬後諡也國稱大駕洛又稱伽耶國即六伽耶之一也餘五人各歸爲五伽耶主と記せり。然れども此書には五伽耶の名を誌さず

其疆域を記して。

東以黃山江 西南以落海 西北以地理山

東北以伽耶山 南而爲國尾

とせり。黃山江は洛東江の下流にして地理山は慶尙南道全羅南道の界に亘り伽耶山は高靈の東北に慶尙南北兩道の界にあり。此四至は大駕洛の四至か六伽耶の四至か稍明瞭を缺くと雖六伽耶の四至を表示するものゝ如し。

三國遺事には五伽耶と題して

五伽耶

按駕洛記贊云垂一紫纓下六圓卵五歸各邑一在茲城則一爲首露王餘五各爲五伽耶之主金官不入五數當矣而本朝史略並數金官而濫記昌寧誤矣

阿羅一作伽耶今咸安 古寧伽耶今咸安 大伽耶今高靈

山伽耶今京山 小伽耶今固城

又本朝史略云太祖天福五年庚子改五伽耶名

一金官爲金 二古宧爲加 三非火今昌靈 餘二阿

羅星山同前星山 作碧珍伽耶

とせり。此記事は頗る貴重なるものにして加羅の研究は是に依りて一步を進むることを得るものなり。本朝史略の名は三國遺事の外に所見無し。高麗の古書たることを知りうるのみ。

三國史記本紀には加耶の記事約十條あり。外に加羅の文字を以てせるもの一條あり。加耶を以て新羅の南方に在りとし金海即金 方面を指すが如き場合多けれども高靈方面の加耶を指すことあり。

特に注意すべきは此書の記事より推して金海の加羅なること明白なる場合には加羅と稱せずして金官國と記せる事是れなり。此書の地理志には(一)金海の古金官國にして一に加落國と云ひ一に伽耶と云ひし事(二)咸安の阿戸良國にして一に阿那加耶と云ひし事(三)高靈の本と大加耶國たりし事(四)咸寧の古寧加耶國たりし事を記せり。

永樂二十三年の慶尙道地理志は今閲覽の便無く余の不完全極まる抄録によるの外なきが此書には高靈を大伽耶國とし咸昌即高麗の咸寧を古寧伽耶國とし金海を大伽羅國とせり。他は余の抄録本によりては明ならず。他日の校訂を期す。世宗王實錄地理志高麗史地理志は前記慶尙道地理誌の四伽耶の外に固城を小伽耶とせり。

六伽耶の處在地を説く者從來輿地勝覽の記事によれり。此書は金海を以て第一伽耶とし五伽耶に就きては金海府 固城爲小伽耶 星州爲碧珍伽耶

耶 咸安爲阿那伽耶 咸昌爲古寧伽耶

と記せり。其星州牧の條に三國遺事以星山伽耶爲六伽耶之一疑新羅取之置本彼縣と記せり。勝覽の六伽耶説は實に三國遺事の所説を採用せしものなり。勝覽は伽六耶の位置に就ては三國遺事の所説を採り其疆域に就ては駕洛國記の説を採れり。咸昌の地たるや實に此疆域の外に出づる事我が三十

里なるに心付かざりしは遺憾なり。

本朝史略の五加耶説は最も注意することを要す此説に従へば昌寧の非火が洛東江山江の外に出で星山加耶が少しく加耶山外に出づるの感あるも駕洛國記に記する四至と大體に於て一致す。駕洛國記にして五加耶の名を列擧せしならんには決して咸寧即ち咸昌の地を其一とはなさざりしなるべし。

本朝史略の記事は五加耶の位置に就きては異説ある事を示すと同時に尙ほ重大なる事を明にせり即ち三國遺事の説は金官伽耶を第一伽耶とし是に他の五伽耶を配する説にして本朝史略説は高靈耶伽を五伽耶の外に置きて之を第一伽耶とし是に金官以下の五伽耶を配すべき説なる事なり。

非火を昌寧とせるを恐高靈之訛と記せるは三國遺事の撰者なり  
思うに六伽耶説は伽耶の諸國中主要なるもの六國ありしとの傳説によりて之を伽耶國の古墟と傳

へらるゝ諸地方に配當を試み其或るものは所傳ありて之を誤ることなかりしも其所傳なきものには其配當に異説を生ぜしものなるべし。而して伽耶の諸國は決して六國に止まらず。余をして云はしむれば金海も高靈も咸安咸寧咸昌星山加利昌寧碧珍星州等皆伽耶の國ありし事を傳へ居りしものたるへし。駕洛の疆域が新羅の擴張に従て縮少せしこと論なし。駕洛國記に記する疆域又日本書紀崇神紀に任那者去筑紫國二千餘里北阻海以在雞林之西南とせる疆域は駕洛が縮少せし時代の疆域にして其大體を示すものにすぎざる也。

加羅即任那諸國が僅に止まらずして尙ほ數多ありしことは日本書紀によるも明なり。欽明紀二十三年任那日本府滅亡の條の註に

總言任那別言加羅安羅國斯二岐國多羅國卒麻國古嗟國子他國散半下國乞浪國稔禮國合十國とあれど是れ或る時代の任那の主要なる國なりし



か或は註者が知れる限りの國なりしかなるべし前後を通ずれば書紀に尙ほ多くの國名地名見ゆ即ち(1)意富加羅(2)加羅(3)南加羅(4)任那(5)安羅(6)古嗟(7)子多(8)已吞(9)乞浚(10)稔禮(11)散半奚(12)斯二岐(13)卒麻(14)多羅(15)哆喇(16)伴跋(17)比自怵(18)已浚(19)喙(20)卓淳等是なり。而して此等の名稱の中には異名にして同國のものもあるべく亦地理的稱呼にして國名にあらざるものもあるべし。

既に述べしが如く加羅諸國の中其強盛なるものは全加羅の盟主となり或は盟主を以て仕じ其國を大加羅國若くば單に加耶と稱せしを以て甲の加羅國と乙の加羅國とを混同せるを史官は諸種の史料より其用語を精査することなく直に收録せしを以て國史にも韓史にも同一名を以て別異の國の事を記するに至りしものゝ如し。金官にありし加羅も高靈にありし加羅も共に大加羅或は加耶と稱せしこと既に之を述べたり。阿羅、古寧、古自の國名

亦「大」の義なるが如し後章に説明すべし。

### 三

本章に於ては金官加羅の事其任那の本地なる事高靈加耶の事。金官高靈兩加耶を別つべき事を論せん。とす。

#### (1) 金官加羅

國史崇神紀の意富加羅は此の金官加羅なるべし今の金海の地にして早くより金官と稱する別名あり。新羅末の頃より金州とも稱せり扶桑略記による洛東江の江口の西に當り高麗の中頃まで日本交通の最要地なりき此國は漢京既に狗邪韓として知られ魏志弁辰十二國の一に擧げらる狗邪加耶の訛れるなり。金官の金は金の現代語劍ツル即ち蘇ソまたは沙の字音に近く訓みしならむか。官は加羅の羅を略して加の音をとりにしものならむ。或は金を言Kimと訓みて本と「大」の義なりしか。いづれにしても至上の加羅の義あり。勝覽に金寧の別號ありとせり。寧は羅に通ず。

此國大加羅或は單に加羅とも稱せし外に南加羅

とも呼ばれたり。任那は此國の本來の名稱なり。今之を論證せんとす。後梁の龍德四年(944A.D.)

新羅景明王撰眞鏡大師塔碑變尙道昌原鳳の序に

大師諱審希俗姓新金氏其先任那王族草拔聖枝

每苦鄰兵投於我國遠祖興大王云々

の語あり。興武大王は金庚信の諡号にして庚信は新羅に降りし金官國王仇衝の曾孫なり。新金氏といふは新羅の王家金氏と區別していふなり。金官を任那といふ事以て證す可し。但し此碑文の海東

金石苑に收録するもの任那を誤て住那に作れり。

原碑及原拓本によりて調査するに任字の上に原石

に少損あるより金石苑の編者誤て住字とせしもの

なり。廣開土王陵碑記に任那加羅あり安羅あり記

して

追至任那加羅從拔城城即歸服安羅人戍拔新羅

城扞城

とあり。安羅は加羅諸國の一にして廣義の任那の

一國なり。これによるも安羅と任那加羅即ち加羅の一國たる任那狹義のとは自ら別にして此の場合に於て任那は加羅諸國を包含する稱呼にあらざるなり。通典東夷傳に

新羅遂致強盛因襲任那諸國滅之

とあるは加羅諸國中任那の名特に高かりしかば加羅と任那とを別ちて書くに至りしものにして任那の名は全加羅を包容するものにあらざるを知るべし。又宋書東夷傳に

元嘉二年本紀を按ずるに元嘉十五年なるが如し讚又遣司馬曹達奉表

獻方物讚死弟珍立遣使貢獻自稱使持節都督倭

百濟新羅任那秦韓契韓六國諸軍事安東大將軍

倭國王中略二十年倭國王濟遣使奉獻復以爲安

東將軍倭國王二十八年加使持節都督倭新羅任

那加羅秦韓慕韓六國諸軍事安東將軍如故中略

武立自稱使持節都督倭百濟新羅任那加羅秦韓

慕韓十國諸軍事安東大將軍倭國王順帝昇明二

年遣使上表曰中略 詔除武使特節都督倭新羅任  
那加羅秦韓冀韓六國諸軍事安東大將軍倭王

とあり。之によれば珍王の自稱せられしといふ諸  
軍事たる六國中の任那は國史に常に用ゆる廣義の  
任那にして加羅全體を指すものあり。然るに二十  
八年文帝が認めし六國諸軍事の六國中には百濟を  
去りて加羅を加へたり市村博士は十數年前東京大學に於て  
軍事たることを認むる能はざりし事之が爲めに加羅を加えて國數  
次を六にせしものなる事之に對して倭王武は更に百濟なり加羅  
をも列舉して七國諸軍事と稱せられ宋は百濟を去り、任那の必  
ずしも加羅を含まざるものなることの一支證とす  
べし。但し其證として力稍弱し。

三國史記中に任那といふ文字唯一所あり。即ち  
強首の傳中に強首中原京沙梁人也とし記事中に強  
首が新羅太宗武烈王に答へし語を録し臣本任那加  
良人也とあるもの是なり。説者或は之を以て任那  
加良を新羅中原京なりとし新羅の中原京は今の忠  
州なるを以て任那加良を忠州とし任那の範圍忠州

に及びしとするものあれば是れ不可なり。三國  
史記地理志には「中原京本高麗國原城新羅平之眞  
興王置小京文武王時築城周二千五百九十二步景德  
王改爲中原京今忠州とあり本紀眞興王十八年の條  
に以國原爲小京とし翌十九年の條に徙貴戚子弟及  
六部豪民以實國原とあり。國原小京が中原京と改  
められしは景德王十六年なるを以て太宗王代の忠  
州に中原京の名なし。沙梁部は新羅の王畿六部の  
一なり。國原京に六部の民を移せる事前記の如き  
を以て此小京にも六部の名無しとは斷定し難けれ  
ども地方の小京にまで國都と同名の六部ありしや  
は疑ふべし。尤も新羅の部といふものと其人との  
關係は頗る複雑せるものにして簡單に解し難きも  
の、如きも研究の現今の程度に於ては國原小京の  
人にして沙梁部の人なりと稱することは有るまじ  
きやに思はる。強首傳の中原京は新羅國都にして  
中原京沙梁部は強首の在籍地なるべく任那加良は

其本地即ち家の出でし地なるべし。臣本任那加良人の語中の本の語に注意すべし。中原京沙梁部と任那加良とは中原京が何地なるにもせよ別地なるべし。

金官加耶は高靈に在りし加耶と南北相對して有名なりしを以て之に對して南加羅とも稱せり。三國史金庾信傳に「南加耶始祖露音與新羅同姓也」と記せるは金官加耶を南加耶と稱するの證なり。書紀欽明紀二年の條に載する百濟王聖明の語中に此國の積衰して滅びし事を其南加羅アリシカテ葦爾狹少不能卒備不知所託由是見亡といへり。然れども日本書紀には南加羅の稱呼を時には加羅地方の南方の義に用ゐしことあり。特に南韓と記せるものは國名にあらすして餘航山脈南沿海の加羅地方を指すものとす。書紀神功皇后四十九年に平定せりと傳ふる七國中の南加羅は此金官加羅の國なるべし。

金官加羅は駕洛國記あるを以て能く開國の傳説

を遺存せり。其始祖王を首露王と傳ふ。其國の位置よりするも最も早くより日本に服屬し其國を維持せしが繼躰天皇の時日本の勢力漸く減退し新羅の勢力日に熾んなるの重大時期に當り大伴大連金村の失政によりて上叻喇下叻喇沙陀牟婁の四地此地のこと後章に考ふべしを百濟に與へしかば高靈の大加耶日本に離叛し又已汶地の地を百濟に與へしかば伴跋國官加耶は強大なる新羅の壓迫に堪ふる事能はず新羅法興王十九年壬子(書紀繼躰天皇二十五年辛亥の翌年)其國王仇衝は新羅に降れり。仇衝は書紀の任那王已能末多干岐なるべし。以後日本と加羅内地との交通困難となるに至れり。

此國は此王族の後より金庾信の如き英雄を出せると駕洛國記の如き記録の存せしを以て特に有名となれり。若し古墳等遺物より考ふれば安羅もしくは高靈加耶等よりも大なる國にはあらざりしが

如し。然れども古くは狗邪韓の名を以て知られしものなり。其末路は叢爾狹少となりて新羅に降りしなり。若し任那史を論せんとならば洛東江を論じて此國事を説かざるべからずと雖本編は疆域考を主とするが故に之を略すべし。尙ほ此滅亡後も任那の名存じて書紀に見ゆ此事は後章に説くべし

金官の名は三國史記には婆娑尼師今二十三年の條に金官國主首露王と記せり。然れども後代の史料によりて此國名を用ひたるかの疑なきにあらず。地理志には金海小京古金官國と記せり金官の名新羅の金官郡を以て初めとするものにあらずと

## 土 一 揆 (下)

雖此名稱の起りしは此國の末期なるが如し。金官の名は日本書紀には濩體紀二十三年の條に新羅の伊叱夫智禮干岐が掠めし多々羅原(多大浦懸)附近の四村の註に見ゆ。伊叱夫は三國史記の異斯夫(或云菅奈)にして三國遺事には姓を朴とし伊宗と書けり。三國史記異斯夫傳に異斯夫智度路王時爲松邊官襲居道權謀以馬戲誦加耶(或云加羅)國取之とあり後に眞興王二十三年將となりて加耶(高懸)を滅ぼす。史記紀年によれば眞興二十三年は智度路王死後約五十年なるを以て武將として異斯夫の活動期稍長きにすぎたり。其以馬戲誦加耶國取之といふものは恐くば法興王時代にして書紀の所謂四村を掠略せる事をいふものなるべし。(第三章未完)

## 文學博士 三浦周行

五 一揆の兵力(續)

應仁文明の内亂にありては、東西兩軍の兵力殆ど相如き、戦地も略局限せられ、且つ兩軍の對峙久しきに彌りて戦らしき戦は少く、僅に洛の内外

に於て小競合を繰返せるに過ぎず。而かも將士は戰に倦みて、みづから決死的戰鬪をなすを避け、土民兵を以て己れに代らしむるの傾向を生ぜり。敵の備へざるに乗じて火を縱つて奇襲を加ふるこ